

〔農業経営〕

彼杵半島地域における和牛の飼養構造

森 国男・松藤正伝

(長崎県総合農林センター)

MORI, K. and MATUJUJI, M.

The Raising Types of Japanese Cattle in the NISISONOGI Peninsula.

長崎県の彼杵半島では和牛の飼養形態が明瞭に区分される。

すなわち、内海地区(西彼村、琴海村)での壮令肥育、外海地区(大瀬戸町、外海町、三重村)での若令肥育、西海地区(西海村)での生産、および周辺諸島(崎戸町、大島町)の生産素牛育成である。

しかも壮令肥育、若令肥育では牡牛の飼養が圧倒的であるのに対し、生産および生産素牛育成地帯では牝牛の飼養がなされている。

これら飼養形態に差異をもたらした要因を、農家の経営規模、作目構成、飼料構造および経済収支の面から検討したが結論は得られなかった。

飼養状況(40年センサス、39年畜産課調)

地域 区分	町村名	和牛飼養			規模		
		農家率	戸当頭数	牝牛率	戸当耕地	戸当水稻	戸当甘藷
壮令 肥育	琴海村	61.7%	1.15頭	99.0%	104 ^a	38 ^a	21 ^a
	西彼村	57.0	1.09	80.5	100	38	18
若令 肥育	大瀬戸町	48.2	1.10	75.0	55	19	16
	外海町	43.4	1.13	96.6	42	12	20
	三重村	45.2	1.09	99.5	56	17	21
生産	西海村	58.0	1.19	23.8	89	25	26
素牛 育成	崎戸町	29.3	1.05	0	34	6	14
	大島町	21.6	1.03	—	40	4	20

1. 飼養形態と経営諸要素との関連

表にみられるとおり地域の飼養農家率、戸当頭数は経営規模との関連があり、経営規模が大きくなるに伴って飼養密度が高くなることが認められる。そのことは当地域での和牛飼養が耕地生産の粗飼料に依存していることを示している。

しかしながら、経営規模の大きい琴海村、西彼村、西海村を比較すると、飼料要求度の高い壮令牛を飼養しているが、琴海、西彼が牡牛の壮令肥育形態であるのに対し、西海は生産主体である。同様に耕地規模の小さい諸町村においても若令肥育と育成がなされている。いずれにしても経営規模、作目構成等によってこれら飼養形態の差異をもたらした要因は説明できない。

2. 飼料構造

飼養形態別の飼料構造をみると、自給飼料では稲わら、甘藷づる、そさい残さい、麦、れんげが主体で、肥育地帯ではこれに甘藷が加えられている。

購入飼料としては大豆粕、米ぬか、ふすま等が用いられている。これらの飼料給与量は飼養形態によって若干異なっているが、飼料構造を考へても大きな差異は見出せなかった。

3. 経済収支

年間1頭飼養の所得は生産16.9千円(時間当59円)、若令肥育26.0千円(時間当78円) 壮令肥育39.6千円(時間当105円)となり、生産地帯が最も劣っていた。

4. 考察

以上の結果から彼杵半島の和牛飼養形態を農家の経営経済的側面からみた限りでは、その差異をもたらした要因を捉えることはできなかった。

特に牡牛飼養地帯では、これまで林木の胴引き、駄載に使用していたが、森林資源の枯渇、農耕面での耕耘機の導入によって役利用の役割が低下したため肥育形態に移ったといわれ、牝牛飼養地帯では役利用+生産ないし育成が、役利用度の減退に伴って生産、育成そのものになったものといえる。つまり過去の飼養慣行を基軸としてより商品生産化の方向を強めているものと考えられる。